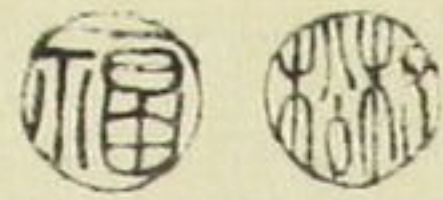


籟亭仙景作  
一勇齋國芳画

初<sup>もつ</sup>氏<sup>ト</sup>雅<sup>おさお</sup>  
五編  
源<sup>せん</sup>東<sup>つづまの</sup>嶽<sup>とび</sup>







雅源氏東國初旅五編  
其時菴主の佛前を後して

夜叉御前  
姫の圖

笠亭仙果作



こゝろふしひひあつら  
しや修験者ら  
五年以前伊勢國  
古市の伊藤武  
者景綱を替  
し疾九の太刀を  
奪ひて別柳下盡さ  
あつら運つて首と臍分断由  
せし安渡に住建つてそのめりけり  
悦面ふ溢るん其こと頭領み今ゆりあへ見え  
優曇華の花海月の骨青道心  
猿犬の毛脱劣る老僧の菴室あつらと案外さつらふ  
悪てかみんさつら夢ももあつらさつら  
かふ叶さつらつらあ音高と孤屋の軒も生る佛耳草口豆葛の







五條坂白拍子阿古王  
ごぎょうざかのしろはくはしあごこう



不斬櫻

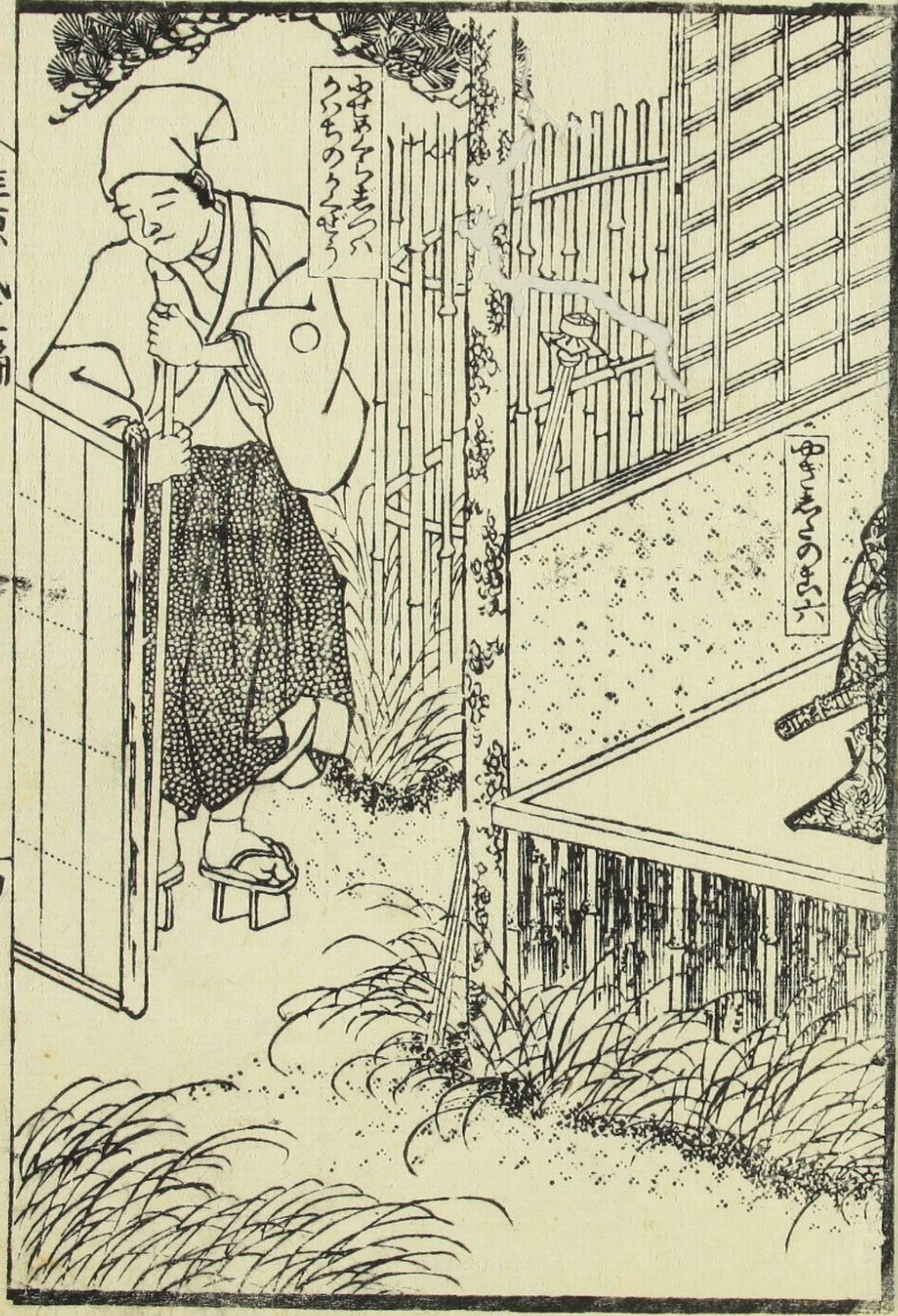
悪七兵衛景清  
あくしちべゐけいせい



ていかる垣の中繩のめい目ありと花のかさかさうらけしむのさきふきの下者  
あやくこそせ雅儀の場ふれもあましの敵ふかまらんぢとせとふいふまう  
命かきりふきのめけてさすぶあか物具も奪かきれどもあつて利徳あるは  
いもあちのけ死あつらふ尋れどもゆえたれぬらあくほれかきとらう三河  
小あつて三幸あまう後この野ざらふ幸いさくそ法師のさきとこの庵  
をわがふひて藤沢寺の弟子といふとらうとらうと決録しまき良草を調合し  
夢想ありとて人あつてその價とひららるる功徳あつてしららるけれ信と  
をてしてさき僧とらままふ高貴の由自然とま入るるとそそかきふ因果  
をさきからふふ病と治まればさき道徳あるものこまひてよりづあふえ  
ままてさきくまのきつとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
まを後さきさきとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
張楚ともさるものさきとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
われ礮石と用い毒殺して物をとり死骸は深森よからるる一藍川の淵に  
結ぶのあたる能言といひらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
標とふらさきほとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう

たるからる金さきとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
の初昔よりさるれら後のもうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
せんまづ一版ととてとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
小野七糸かららうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
かひもあつらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
一人懐持る一人とらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
とけたるらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
と茶碗と圓炉裏の問ふらき張楚の茶碗をさる金さきとらうとらうとらうとらう  
さけて門らうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
おまむとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
もさきみえとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
と和らうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
けらる煎茶布とらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
亀井村真觀寺の作おらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
六ふらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう





権原式五編

権原式五編



権原式五編



本名あり



一本の傘をたのまの軽業のり命と細く危き世綴りひこのものいづかめと  
 自他平ホハ佛の教緑林の樹下石上野宿して百味の飲食賞賜するま  
 わせび金殿む橋の隅ふうくれて飢渴とらふるまあひめまのいづか  
 むうういず貧富とらふる廻のせまありひこのものあまの二徳十徳  
 と著て医者まの化けとめらるるとりも邪のうらまふもひもせまそ  
 らひ法師の門へねらう目ふもろくの石浄をてもらふのうくの石浄と  
 るす六木青浄このあやうくころ鈴音のコロリとせらあまのいづか  
 よ日よりと三筋の毛人あたる名祖負て其徳智慧の人よりのあまそ人  
 の人となる道もらあこのまこひのうらまふもらあまのいづか  
 あとあれもらうかひと律も徳もすそりひ領たのまのいづか  
 とあまのうけのちまきく体身せうら吉左右あつまひらうかひ  
 われあ修験いづの新赤地仙窟して酒とあつまひらうかひ  
 といへまのいづかひの人あまのいづかひのあまのいづかひ  
 三人の盡六といづかひのいづかひのいづかひのいづかひ  
 けり徳坂の藤原といづかひのいづかひのいづかひのいづかひ



と入口の障子どりのけりけりから、越中へあるのききも腹薬をいれま  
 えついで解毒眼薬毒葉お取次ぐとるまうぐもあもまうま  
 せあひー皮籠おろきおとりの裨時賣「お屋よちいさのひらうお求  
 くささせませと小庭にかつぎー荷とあうーわうのまうかーまうま  
 「三十修りの徳北山伏中へいまからさうまきー用事のひらうと  
 聞て徳坂にお申き奴とこそこころいー山伏らーいものもこわがるの草の体  
 らふせこころいさまういさこころいさー虎とがーおのまのまやま取次草も  
 おとさこころいさひのひらうのまういさのひらうのまういさーまひも  
 せーうらうまをいさいさお屋ーわう「きららういさせぬ澄故におまを撮たあ  
 りらう救株志しおとくいさ地山伏柳下盡ささうくすういさのは防の  
 泥文字さうーいさいさいさー悪僧あつとこころいささうていさむう入  
 「まういさいさ身ささうーいさいさー世上のわらわのまういさいさいさ  
 じさうー本名あつたれいさのまういさ「わらわいさうーいさいさいさいさ  
 うのまういさ後宿のものまういさいさいさいさいさいさいさいさいさ  
 うてかゝるいさいさいさいさいさいさいさいさいさいさいさいさいさ  
 後方へいさいさいさいさいさいさいさいさいさいさいさいさいさ



徳北おの松

くささういさいさ

いさいさいさ



かへりのふせまよふとよまらばまを思ふなりとまの形の先ふあど  
 るき一件のふせまよふとよまらばまを思ふなりとまの形の先ふあど  
 うちくまらびりり立んとまを思ふなりとまの形の先ふあど  
 ままど地底わらうさうさうものあらまらまらまらまらまらまらまら  
 ちあてまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 夜ありの低き処ふ泉水あり二階屋あり亭あり土蔵ありまらまらまら  
 日の光のとりがけけん昼夜灯火かぐさたあまらまらまらまらまら  
 人あまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 遠路の土のうらちまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 地底の糸つるものやまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 鑼細の階錦帷綾席結構いそまらまらまらまらまらまらまらまら  
 三人よりひるまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 とんとまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 かへふあまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

車座ふるまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 ありまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 見合せてまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 いままらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 夫庭ふかまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 胡亂のものまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 一破一街まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 が朋友心の鬼ふかまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 こまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 とまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 もひらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 最後のまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら





山田村の  
おまじない

山田村の  
おまじない

山田村の  
おまじない

山田村の  
おまじない

山田村の  
おまじない









正のなりきり

まのなりきり

まのなりきり  
二二のり



地僂窟

くまの  
くまの  
のりきり

坂内

坂内

まのなりきり  
まのなりきり

和歌山王

九



上より誓切といふる由まかしのど一者もなき様とて  
 せむり世無世の恥辱をうらみあつてもまことなしと  
 けさも未明小例の如く一匹の猿とつぎ千疋村のあつた  
 きいなる一件野上の里の御土さりの好物桃賦の  
 かもひたり海と河合村の某(秘)姫しあひ目か道具おつり  
 ず一奪いごもやごの志ごとらんわひいせまへといつて  
 まてあつて神道者ふれこれいごちまら神のめぐり  
 會日、明日の夜千両とつて帰る人必しありあはれが  
 せんふまのそ人もかふるまじとれ小まうせてたまは  
 うちけして「あつてちのちいさく道もつごり野もま  
 てあらぬに愚僧が注進令賣播二信高がこと一いつ  
 をつけくる馬四十二疋皆具しける乗馬三疋をさつ  
 一昨日あてき夜に鏡昨夜いさる宮さゆいへるを  
 かつけ非常のそとあつたさるさるさもあはれかた  
 おのせむいさるが樹が助いさるさるさるさるさるさる



のつて  
 りあつた  
 ちのち

ちのち  
 ちのち

此画とて  
 六編の末あり



熊坂きこしてまをどりし「青幕前後左右をて野よししておすくあくと」  
 のところろりのひきぎはも四方小道多し四十人の兵士等物の救とくぞあらせ吉  
 次とそもたぐ商人多利とりとも思ふもさるる各同義ありやいふと一  
 とこのさむせびくして一義よふぶぎこのさるる同義ゆと異口同音ふこまは  
 盡六の徳一街ととうるづき合ふととる最上より頼領ふやまらぬ  
 仔細なる多くておれらる海賊浦次舟が毒さる由利と中其家傑甲  
 か美山ひそと居て逃さるると切奪す男あまども果ふとれむとれく  
 も薩越一助希とあらしてひひふ果も吉次の財ととんと山陣の留  
 主とおき鏡が病小遊女とあり色とりつて信ると感とさ人とをじふ  
 かやう一の始末あり上生の小祖と名のるもの小孫懸想一身を  
 まうせとれくふきりりるづきおととてめおきいづらふまうせと  
 りの小祖言次をも説くおととてあまふふきりり四十海賊の財は皆由利が鬼の  
 浄瑠璃王三河の山ふりりも入運ぶとさふ定りてれく後ありふふ  
 りて道中非常とせげといひつけられらふそのまをと解一えひ  
 とりのとまごふがね由利形とせとつて龍小翼羽がひの下の盗人ら

一言半句もぞとぞとていふまうふ多りさむいりて同通せとらとて幸通せ  
 中うあうらむと後ふの沖はの十希と権の本希とのとておきとやのモ  
 ぐこ小あうつておまらうて二人に控り事下てもあき智慧も分別もいざりし  
 小頼領の此まふおとととととれらる運彼小祖と名のらゆ其まふ  
 あゆきものゝ疑ひりし不卒人のとら小現在おとまれまあれもあつ  
 偽物合意のあぬ小童と盡六のひの胡蝶の徳一「それい去羊より」  
 悲ふふいそとわが耳ふ入るるとととあれ鞍馬の鬼小沙那王といひ平治  
 小亡びりし義朝の末子とやんま近頃天狗と師と兵法と習練し  
 真義と得るといふのあり沙那王いかわくところやも及びぬ美少年ときふ  
 てもおせ小松田利もおとらぬあてかりさゆ一の鬼がらしめて吉次をわご  
 むき由利とさふいおねおんど企つる下とさふあるまやふもあつ  
 使さるる一松とが美頼の辻堂とさるしととれらる横河の馬  
 ちうくかくもめて其のありさるおちおとるものあつ天狗の弟までも人  
 人三面六指もあらぶとてかむりの大勢がひらふらぶのぐいせとせと  
 源氏の権あらぶ財いづもの勢がくべい平家へとて全ふせん継承い







おのゝころり  
おのゝころり



おのゝころり  
おのゝころり

おのゝころり  
おのゝころり

過したるにこの両のりも小桃様といふも御八慈返いらちもげきとちりへ運ぶ  
 貸は多くとも武士やめわらぬ吉次ひとりあまきの高僧様むらえんの大念仏  
 とおなじいし誰れもむむその童由利へりより名のあつ女敵の強くある骨  
 とそをれ興はしきと罪なき家のものなる一むらのとちりあつたのこちり家  
 肉のたつひこのまゝ一むらむらあつたはむらまらちせ一むらむらつてあつた  
 お池うらせんいふふせといひつてとと膝とらちりあつたあつたあつたあつたあつた  
 もとせどもものことせよすてあつてはり人わつてうかびを幾の尻から尻のうら  
 とつてあつてくらとさりで癒へかりんとするともり入のやどハ五十五をりむらりの  
 色香あつたあつた散一暮春の桃様をたてを桶をたてあつたせ教保つたあつた  
 つかあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 までまかりぐけこのうらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら  
 うするれがついで五五膝のこまむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら  
 くりだーやうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 「妙法がむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら  
 せでふ二昔老のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 後

箱源氏五卷









めいさるのあな十七年の  
もはる

大夫進朝長  
龍華越よく  
流矢ふ當り  
深底を貫く  
とらり









妙壽尼  
十三年の  
むらも  
のぐら

佳原入正編



けちまの  
あはまの  
あぐら



権源氏五編

あはまの  
あぐら

あはまの  
あぐら

あはまの  
あぐら









江戸一角

三浦

三浦

三浦



相源白五編

三浦

三浦

三浦

三浦



八咫鏡の章（八咫鏡）と名（名）の二人をさくらり「しづくも昔よりうつりぬ姿  
 その上（上）も聞（聞）えんば名（名）のりあつてもその人（人）ともえんぬ程（程）に忘れぬ者  
 たる眼（眼）のぶらみんかへりともなほいさへいあもあもくたりのもくいつかへ何  
 してあいなせいで奴等の防（防）ハ選（選）俗（俗）あつて「これごとと田舎あまし人（人）と面（面）と  
 れぬハ髪（髪）とそゆ（ゆ）てあふすみその名（名）ハ鬼（鬼）ハ法（法）眼（眼）の僧（僧）位（位）と聴（聴）され（れ）法（法）指（指）持（持）南（南）無（無）の  
 奥（奥）有（有）と傳（傳）くる願（願）未（未）今（今）更（更）くるまうり「こころありハ法（法）あてゆきくしる（し）野（野）出（出）俗（俗）  
 帰（帰）りて金（金）王（王）とのハ法（法）解（解）せられ「このまゆのちあかきくし先（先）にあたる（は）人（人）ハ異（異）妻（妻）  
 死（死）様（様）の故（故）とこいふそめあいらい（い）摘（摘）ともの「かそれハ鬼（鬼）ハ法（法）眼（眼）の毒（毒）とあそ  
 てさそ補（補）の（の）水（水）不（不）扱（扱）ハ（ハ）暫（暫）の間（間）打（打）まわれ水（水）あけし海（海）棠（棠）小（小）手（手）鞠（鞠）を（を）い（い）さ  
 垂（垂）ハ枯（枯）て毒（毒）の澄（澄）しら（ら）く「こころありハ金（金）王（王）旅（旅）人の懐（懐）中（中）ハ探（探）りの名（名）不  
 の書（書）付（付）りやと秘（秘）し（し）掛（掛）くる文章（文章）早（早）袋（袋）とつて中（中）を改（改）むれば心（心）封（封）じせし（し）意（意）書（書）  
 の上（上）書（書）北（北）条（条）四（四）節（節）改（改）むのハ新（新）中（中）細（細）言（言）とらまてころハ「知（知）盛（盛）郷（郷）より伊（伊）豆（豆）への使（使）時（時）  
 政（政）ハ依（依）ぬもを覆（覆）りやして平（平）家（家）の腹（腹）ハ「海（海）氏の再（再）興（興）心（心）さけむらわらふなみか  
 いらふもせよあきかたもふ入（入）ると封（封）紙（紙）とやふり書（書）状（状）をひらき三人（人）のうたを  
 ろらと讀（讀）み平（平）て「このことごとくころふ荒（荒）爾（爾）ころちをこけり」

あきまきる十月

# 東都書物問屋

- 芝神明前 泉屋市兵衛
- 馬喰町三丁目 山口屋藤兵衛
- 月町 栗屋章三郎
- 日町 森屋次右衛門
- 通油町 友屋屋慶次郎
- 津車福井町 山崎屋清七
- 秋町通三助屋敷 吉田屋久三郎



